

スポーツ・ツーリズムに関する研究
— ホノルルマラソンの縦断的研究 —

野川 春夫*

A Study of Sport Tourism

— A Longitudinal Research Study on Honolulu Marathon —

Haruo NOGAWA*

Abstract

The number of Japanese overseas travelers surpassed ten million line in 1990, which happened to be one year earlier than Ministry of Transportation had expected. In the meantime, a variety of sports related events and activities in the overseas have attracted a great deal of Japanese tourists. The more time and money available for leisure activities, and the more people prefer to go abroad, it is an inevitable trend for people to combine sports and leisure with overseas trip. Nevertheless, the area of sport tourism has been neglected to be scrutinized in the field of sports and leisure studies. Therefore, the purpose of this study was to explore Japanese sport tourism on the basis of Honolulu marathon.

The Honolulu marathon of Hawaii is estimated to bring in more than \$24.5 million to the economy of Oahu island in an otherwise slower period. This marathon has become the most favorite overseas event for Japanese, and in fact, more than 50% of the participants have come from Japan since 1988. The increase of the Japanese runners has significantly helped to continue this event in the last five years.

A total of 673 Japanese marathon participants (195 in 1988, 101 in 1989, 377 in 1990) voluntarily participated in this study. Using a series of face to face interview and group interview, this sample subjects answered to a questionnaire either right after the race nearby the finishing line or at the Honolulu International Airport terminal. Data obtained from the questionnaires were analyzed descriptively.

Within the limitations of this study, the findings indicated that majority of the Japanese participants appeared to be more recreation-oriented and yet less money spenders. The six-day trip seemed to become a standard sport tour among the Japanese runners. The overseas sport event seemed to be less able to obtain repeaters.

KEY WORDS: *Sport tourism, Sport event, Japanese participants, Honolulu Marathon*

*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

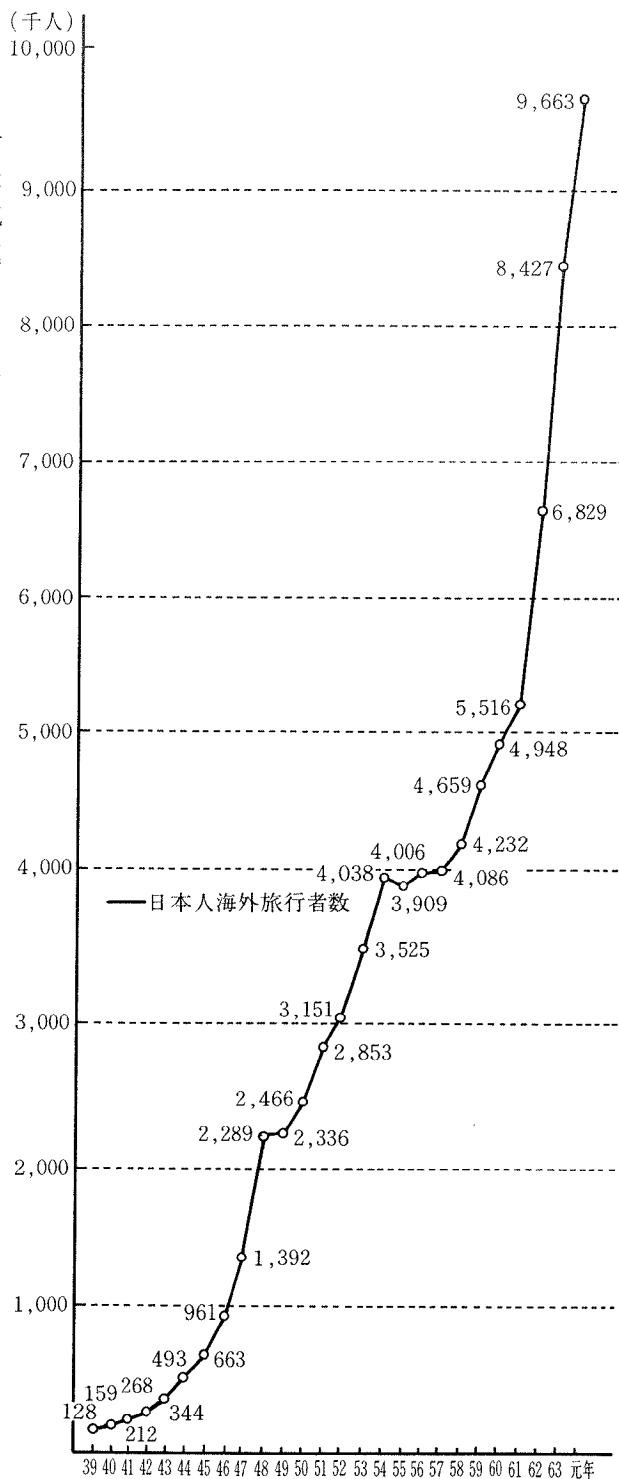
結 言

1986年にイスラエルにおいてスポーツ・ツーリズムの国際会議が開催され、スポーツと海外旅行の結びつきが脚光を浴びるようになった。平成元年に日本人の海外渡航者が史上最高の966万人を記録し、翌年には海外渡航者は1,000万人を越え、運輸省の『テンミリオン計画』を予定よりも1年以上早く達成し空前の海外旅行ブームが続いている(図1参照)。海外旅行の主目的も単なる行楽や観光から、スキーやスキューバダイビングなどのレジャースポーツを楽しんだり、マラソン大会やトライアスロン大会への参加などの参加型が増加している傾向がみられる(図2参照)。

このように膨脹を続ける海外旅行にともない、海外スポーツイベントへの一般大衆の参加も着実に増加している。また、それと並行してスポーツイベントを海外旅行市場に積極的に組み入れてビジネスを展開しようとする旅行代理店やスポーツ産業が増加している(Sports Industry, 1991)。と同時に、国内においてもスキーツアーやゴルフ旅行、スキューバダイビング・ツアーなどが年齢・性別を問わず盛んになっており、スポーツ・ツーリズムには諸外国への渡航だけでなく国内旅行も含まれるのである。スポーツ・ツーリズムとはまさにこのような傾向を反映した言葉といえよう。

スポーツ・ツーリズムとは「スポーツやスポーツイベントへの参加を目的として旅行し、少なくとも24時間以上その目的地に滞在すること」と定義されている(Leiper, 1979)。スポーツ・ツーリズムはスポーツの振興に寄与するだけでなく、その地域社会にもたらす文化的・経済的な効果が大きいことが注目され、オランダ・イギリス・ベルギー3カ国共同の研究も進められている。

このように年々海外スポーツイベントやレジャースポーツへの日本人の参加者が増え続けているにもかかわらず、スポーツ・ツーリズムの分野の研究は皆無に等しい状態といえる。そこで本研究では、ここ数年参加者の過半数が日本人というハワイ・ホノルルマラソン大会を事例として、日本人のスポーツ・ツーリズムに関する実証的な知見



(注) 法務省資料に基づく運輸省集計による。

図1. 日本人海外旅行者の推移

を得ようとするものである。従って、本研究の目的は、海外スポーツイベントへの日本人参加者の実態を明らかにし、スポーツ・ツーリズムの基礎資料を提供することであった。

先行研究の検討

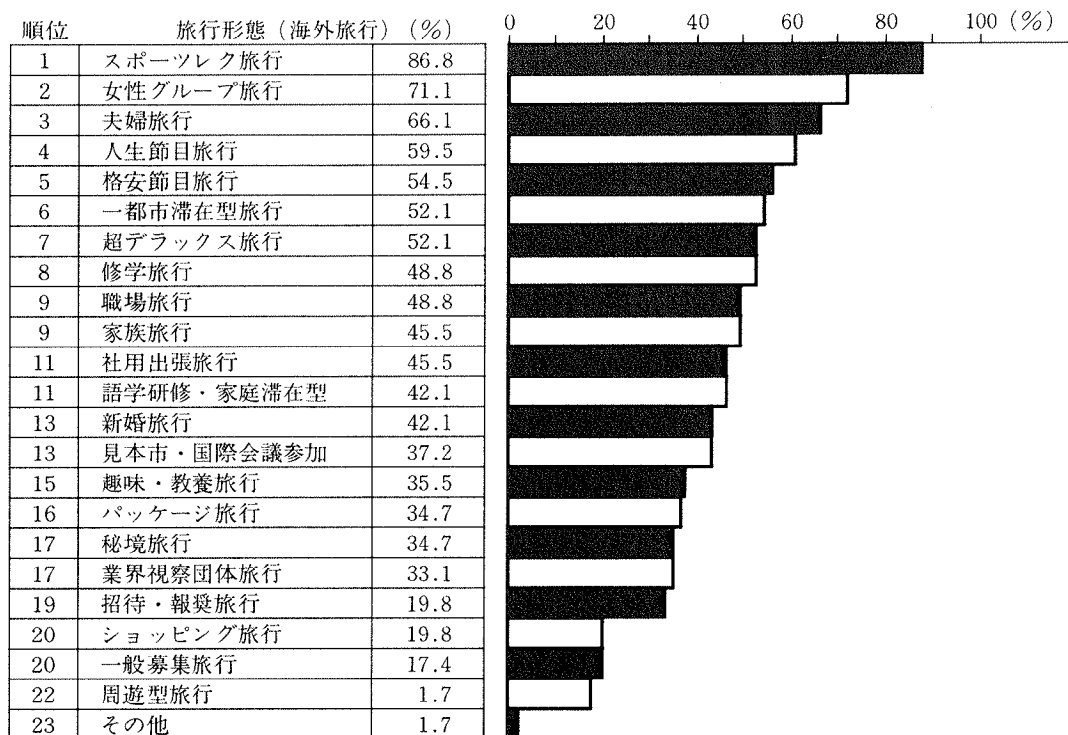
諸外国におけるスポーツ・ツーリズムの研究 (Westland, 1987; Ruskin, 1987; Wang, 1987; De Knop, 1987) は概念定義と社会・経済的な側面に関する説明に終始しており、実証的な研究はほぼ皆無である。これに対して日本ではスポーツ・ツーリズムの研究はほとんど手つかずの状態である。

旅行を伴うスポーツ参加に関する従来の研究視点は、スポーツイベント (山口ら, 1990, 1991; 野川ら, 1990, 1991; 松本ら, 1990) やレジャーライフスタイル、レクリエーション活動などとし

て捉えており、スポーツと旅行を結び付けてその経済的効果や参加者の社会的・経済的側面に焦点を当ててはいない。

また海外スポーツイベントへの日本人参加者に関する研究では、ほとんどの対象イベントが Honolulu マラソンであり、参加者の満足度 (松本ら: 1990) や、参加意識 (塩満: 1990)、および日米ランナーの参加意識と属性の比較 (山田ら: 1988) などが報告されている。しかしながらいずれもスポーツ・ツーリズムの観点からは海外スポーツイベントを捉えてはいない。このような研究傾向の中で、菊池ら (1991) は Honolulu マラソン参加者の支出傾向を基にしてスポーツイベントの経済的な波及効果を明らかにしようと試みている。

このように国内・外のスポーツイベントに関する研究はされているが、スポーツ・ツーリズムの実証的な研究は未だなされていないのが現状である。



資料：(財)日本交通公社 1991年

図2. 海外で増える旅行形態

ホノルルマラソンの概要

ホノルル市民のためのマラソンとして1973年に始まり今年で19年目を迎える。第1回大会は「オアフマラソン」という名称で167人の参加した。完走タイムの制限が緩く大衆ランナーをターゲットとしたこの大会は参加者が年々増加し、現在は1万人を越し参加国も30カ国以上という世界でも有数の市民マラソン大会となっている。(図3参照)。国際色豊かなこの大会は、標準完走記録を参加者に要求しないため完走者の約半数がマラソン初挑戦者ということも特色といえよう (Honolulu Marathon official program, 1990)。これはまた、日本人参加者にマラソン初挑戦者が極端に多いこともその原因となっている。ちなみに第18回大会では約5800人(67%)の日本人参加者が初めてのマラソンであり、総参加者数13268人の約54%(7114人)がマラソン初挑戦であった。

日本人参加者の増加が顕著になりだしたのは1985年の第13回大会からである。第16回大会(1988年)から参加者の過半数を日本人で占めるようになり、その傾向はさらに強くなっている。特に、第18回大会(1990年)では総参加者の約3分の1の8672人が日本人となり、さながら海外での日本人マラソン大会の様相を呈している。これはここ数年間アメリカ人参加者の現象を日本人参加者で補って参加者総数を1万人前後にしてきたが、参加者数の逆転現象は新しい日米摩擦となる可能性もある。

ホノルルマラソンは南海の孤島という地理的にも不利な条件であるが、アメリカ人にとっては日本の「草津温泉」に匹敵するような人気抜群の観光地である。地元ハワイからの参加者は全体の2割にすぎず、ほとんどの参加者は飛行機に乗ってこなければならず、このマラソン大会がホノルル観光と経済に大きな影響を与えているといっても過言ではない。1977年から12月の第2日曜日を大会の公式開催日とすることを決定し、レースも男女別の部門だけから年齢別部門、チーム部門、心臓障害者部門が加わった。12月の第2週はクリスマスを前にして観光やビジネスが落ち込む時期になるので、その時期を狙っての開催である(個人

面接, 1988)。

ジャネット・チャン(Honolulu Marathon official program, 1990)によるとホノルルマラソンが地元オアフ島にもたらす経済波及効果は2450万ドルといわれ、参加者が消費する金額は1日当たり90~175ドルと推定されている。菊池ら(1991a)による調査では、日本人参加者は1日当たり120~180ドルをホノルルで使っていると推定している。ちなみに第18回大会における日本人の総支出は約24億円と見られている(菊池ら, 1991b)。

研究方法

1) サンプル:

“第16回ホノルルマラソン”の	日本人参加者195名
“第17回ホノルルマラソン”の	日本人参加者101名
“第18回ホノルルマラソン”の	日本人参加者377名
	合計 673名

2) 調査期日:

- ・第16回大会: 1988年12月8日(日) 9:00~13:00
- ・第17回大会: 1989年12月8日(日) 9:00~13:00
- ・第18回大会: 1990年12月10日(日), 11日(月), 12日(火) 6:00~12:00

3) 調査場所および調査方法:

- ・第16回大会: 米国ハワイ州ホノルル市カピオラニ公園においてゴールインした参加者を完走時間別に有意に抽出し、質問票を持った6名の調査員がサンプルの合意の上で約15分間の面接調査を行った。
- ・第17回大会: 米国ハワイ州ホノルル市カピオラニ公園においてゴールインした参加者を完走時間別に有意に抽出し、質問票を持った3名の調査員がサンプルの合意の上で約15分間の面接調査を行うと共に、翌日に大会のメインホテル(ハワイアン・リージェンシーホテル)に完走記録を調べにきたサンプルを有意に抽出し、サンプルの合意の上で約15分間の面接調査を実施した。

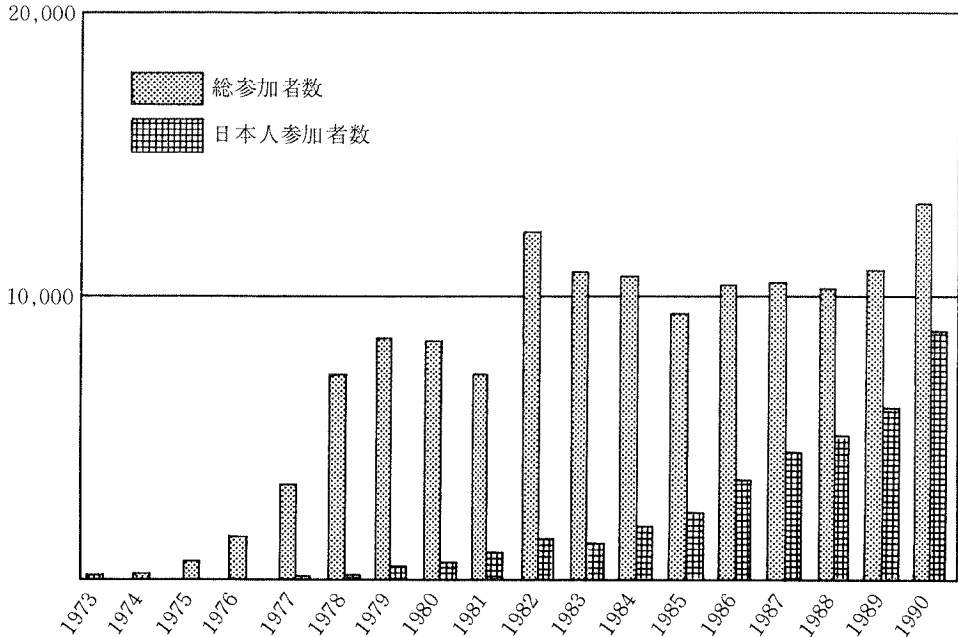


図3. ホノルルマラソン参加者の時系列的推移

・第18回大会：米国ハワイ州ホノルル国際空港
日本向け帰国便搭乗待合室及びその周辺に
おいて、4名の日本人調査員が質問票を用
いて個人及び小集団に面接調査を実施した。

この縦断的調査は、何れもホノルルマラ
ソン実行委員会の許可を得て実施した。特
に、18回大会ではホノルル国際空港管理事
務所の許可のもとで面接調査を行った。

4) 調査内容：

三つの調査とも調査内容は基本的には同じであ
り、サンプルの個人的属性、滞在日数、総支出額、
同伴者、参加回数、運動習慣、イベント運営に関
する満足度、参加のきっかけ、及び当該イベント
への再参加の希望などを網羅した。

イベント運営に対する満足度、及びイベントへ
の再参加の希望の項目の回答は Likert - scale type
の4点評定法を用いた。

5) 分析方法：

収集したデータは項目別に単純集計を行い、主
な項目を年度別にクロス集計を行った。

結果と考察

3年間の縦断的研究に協力した日本人サンプル
673名の資料を分析した結果、以下のことが明らか
になった。

1) サンプルの属性

表1が示すように参加者の男女別の割合は3対
1であり、総参加者の男女比率とほぼ同じであっ
た (Honolulu Marathon Association, 1990)。
また、表1にみられるように女性の参加率が年々
伸びていることもここ数年の傾向と一致していた。

参加者の年齢別では、20歳代の参加者が突出し
ており、30歳代と40歳代がこれに続いていた。年
齢別の総参加者数の分布は本サンプルと酷似して
いる。20歳代と30歳代が参加者全体の%を占めて
いる理由としては、イベント自体が高い体力水準
を要求していること、手ごろな値段のパッケージ
・ツアーがあること、観光名所としての人気が高
いという地理的条件、余暇のライフスタイルの変
化が最も顕著にでる年代である等が考えられよう。

表1. サンプルの属性及びマラソン参加経験(年度別)

	1988年	1989年	1990年
 %*		
性別			
男性	77.9%(n=152)	73.1%(n=68)	72.5%(n=269)
女性	22.1%(n=43)	26.9%(n=25)	27.9%(n=104)
年齢層			
20歳未満	4.6%(n=9)	7.0%(n=5)	5.7%(n=19)
20歳代	38.5%(n=75)	57.5%(n=41)	57.1%(n=192)
30歳代	22.1%(n=43)	15.4%(n=11)	17.6%(n=59)
40歳代	19.5%(n=38)	9.8%(n=7)	10.7%(n=36)
50歳以上	15.4%(n=30)	9.8%(n=7)	6.8%(n=30)
職業			
会社員	49.0%(n=94)	37.0%(n=37)	49.9%(n=184)
公務員	11.5%(n=22)	7.0%(n=7)	6.2%(n=23)
自営業	6.8%(n=13)	3.0%(n=3)	2.2%(n=8)
学生	19.8%(n=38)	34.0%(n=34)	29.0%(n=107)
その他	12.9%(n=25)	19.0%(n=19)	12.7%(n=47)
スポーツクラブの所属			
所属している	52.5%(n=103)	54.1%(n=53)	N/A**
所属していない	47.5%(n=92)	45.9%(n=45)	N/A
フルマラソン参加回数			
初参加	56.2%(n=109)	61.6%(n=61)	56.8%(n=187)
2回目	12.9%(n=25)	11.1%(n=11)	11.6%(n=38)
3回目	10.3%(n=20)	7.1%(n=7)	11.5%(n=38)
4回以上	20.3%(n=40)	20.0%(n=20)	20.1%(n=66)
ホノルルマラソン参加回数			
初参加	86.6%(n=168)	85.9%(n=85)	84.2%(n=326)
2回目	7.7%(n=15)	9.1%(n=9)	7.0%(n=27)
3回以上	5.5%(n=11)	5.0%(n=5)	8.8%(n=34)

注:()内はサンプル実数

* 全体のパーセントは縦にみる

** この質問は省略された。

ちなみに1989年の日本交通公社による調査では、ハワイは「スポーツ旅行で行きたい国」のNo.1に挙げられている(Sports Industry, 1991)。

職業別では、サンプルの約70%が社会人であり、企業に勤務する「会社員」が全体の半数を占め、学生が2番目に多く約3割を占めていた。本データからも学生層がツーリズムの顧客として重要な位置を占めていることが窺えよう。

2) サンプルのマラソン歴

ホノルルマラソンが初めてのマラソン体験であ

ったサンプルが全体の過半数を越えていることが表1に示されている。また、フルマラソンを4回以上経験した参加者はサンプル全体の20%と本サンプルのマラソン歴が浅いことから、大部分の参加者は競技志向ではなくレクリエーション志向と考えられよう。

12月とはいえ気温が28度前後に上昇するハワイにおいて42.195kmを初体験する参加者が全体の過半数を占めていることは、安全面における問題の存在を示唆している。事実、第18回大会(1990年)

表2. サンプルのスポーツ・ツーリズムの概要(年度別)

	1988年	1989年	1990年
 %*		
滞在日数			
3日間以下	10.3%(n = 19)	0.0%(n = 0)	4.5%(n = 17)
4日間	41.9%(n = 78)	6.9%(n = 7)	20.5%(n = 78)
5日間	37.1%(n = 69)	27.7%(n = 28)	32.4%(n = 123)
6日間	5.4%(n = 10)	21.8%(n = 22)	27.1%(n = 103)
7日間以上	5.4%(n = 10)	43.7%(n = 44)	15.5%(n = 59)
同伴者			
単独	21.6%(n = 42)	22.1%(n = 21)	8.2%(n = 30)
家族	13.4%(n = 26)	16.8%(n = 16)	13.9%(n = 51)
友人・知人	42.3%(n = 82)	31.6%(n = 30)	33.0%(n = 121)
スポーツクラブのメンバー	17.5%(n = 34)	20.0%(n = 19)	29.4%(n = 108)
その他	5.2%(n = 10)	9.5%(n = 9)	15.5%(n = 57)
情報源			
新聞・雑誌	36.2%(n = 68)	33.3%(n = 32)	14.7%(n = 55)
テレビ・ラジオ	25.0%(n = 47)	26.0%(n = 25)	9.4%(n = 35)
ポスター	6.4%(n = 12)	3.1%(n = 3)	3.5%(n = 13)
友人・知人	27.1%(n = 51)	35.4%(n = 34)	57.2%(n = 214)
その他	5.3%(n = 10)	2.1%(n = 2)	15.2%(n = 57)
休暇の種類			
有給	57.1%(n = 109)	47.5%(n = 47)	N/A**
代替	17.8%(n = 34)	5.1%(n = 5)	N/A
出張	2.1%(n = 4)	1.0%(n = 1)	N/A
その他	23.0%(n = 44)	46.5%(n = 46)	N/A

注:()内はサンプル実数

* 全体のパーセントは縦にみる

** この質問は省略された。

では不幸にも56歳の日本人参加者がレース途中で意識不明となり、病院に運ばれてから死亡している。

本大会への初参加者はサンプルの85%を占め、2度、3度と来訪して参加する「リピーター」は約15%にすぎないことが表1から明らかになっており、リピーターをコンスタントに増加させることが、ホノルルマラソン大会実行委員会のみならずパッケージ・ツアーを商品化している日本のスポーツ関連業にも大きな課題となろう。

3) スポーツ・ツーリズムの概要

滞在日数

サンプルのハワイ滞在日数は、年とともに増加

する傾向にある(表2参照)。男女別及び年齢別のサンプルの滞在日数の傾向が表3・表4に示されている。第16回大会では4日間の滞在が最も多かったが、第18回大会では1日増えて5日間滞在したサンプルが最も多かった。ほとんどのサンプルがパッケージ・ツアーを利用していることから滞在日数は、パッケージ商品に左右されると考えられるが、パッケージは利用者のニーズを反映しているともいえよう。したがって滞在日数がわずかに増加しただけであるが、「ゆとりのある旅行」が徐々に浸透している証ともいえよう。

サンプルの約半数(1988年, 1989年)が、有給休暇を利用して大会に参加していた。「その他」と

表3. サンプルの滞在日数の傾向 (性別)

	1988年	1989年	1990年
. %*			
男性の滞在日数			
4日間以下	52.7%(n = 77)	8.8%(n = 6)	25.4%(n = 67)
5日間	34.9%(n = 51)	29.4%(n = 20)	29.5%(n = 78)
6日間	5.5%(n = 8)	23.5%(n = 16)	28.8%(n = 76)
7日間	3.4%(n = 5)	27.9%(n = 19)	11.0%(n = 29)
8日間以上	3.4%(n = 5)	10.3%(n = 7)	5.3%(n = 14)
女性の滞在日数			
4日間以下	50.0%(n = 20)	0.0%(n = 0)	23.3%(n = 24)
5日間	45.0%(n = 18)	28.0%(n = 7)	37.9%(n = 39)
6日間	5.0%(n = 2)	16.0%(n = 4)	23.3%(n = 24)
7日間	0.0%(n = 0)	16.0%(n = 4)	12.6%(n = 13)
8日間以上	0.0%(n = 0)	40.0%(n = 10)	2.9%(n = 3)

注: ()内はサンプル実数

* 全体のパーセントは縦にみる

表4. サンプルの滞在日数の傾向 (年齢別)

	1988年	1989年	1990年
. %*			
30歳未満の滞在日数			
4日間以下	65.0%(n = 52)	5.2%(n = 4)	25.6%(n = 54)
5日間	25.0%(n = 20)	26.4%(n = 20)	35.5%(n = 75)
6日間	2.5%(n = 2)	22.3%(n = 17)	21.8%(n = 46)
7日間	2.5%(n = 2)	21.1%(n = 16)	10.9%(n = 23)
8日間以上	5.0%(n = 4)	25.0%(n = 19)	6.2%(n = 13)
30歳代の滞在日数			
4日間以下	47.5%(n = 19)	27.2%(n = 3)	22.0%(n = 13)
5日間	47.5%(n = 19)	18.2%(n = 2)	20.3%(n = 12)
6日間	5.0%(n = 2)	9.1%(n = 1)	40.8%(n = 24)
7日間	0.0%(n = 0)	45.5%(n = 5)	15.2%(n = 9)
8日間以上	0.0%(n = 0)	0.0%(n = 0)	1.7%(n = 1)
40歳代の滞在日数			
4日間以下	44.4%(n = 16)	0.0%(n = 0)	34.3%(n = 12)
5日間	50.0%(n = 18)	29.6%(n = 2)	25.7%(n = 9)
6日間	0.0%(n = 0)	42.8%(n = 3)	20.0%(n = 7)
7日間	2.7%(n = 1)	28.6%(n = 2)	17.1%(n = 6)
8日間以上	2.7%(n = 1)	0.0%(n = 0)	2.9%(n = 1)
50歳代の滞在日数			
4日間以下	33.3%(n = 10)	0.0%(n = 0)	21.3%(n = 16)
5日間	40.0%(n = 12)	57.1%(n = 4)	36.0%(n = 27)
6日間	20.0%(n = 6)	14.3%(n = 1)	34.7%(n = 26)
7日間	6.7%(n = 2)	28.6%(n = 2)	5.3%(n = 4)
8日間以上	0.0%(n = 0)	0.0%(n = 0)	2.7%(n = 2)

注: ()内はサンプル実数

* 全体のパーセントは縦にみる

回答したサンプルの大半が学生と主婦であり、特に学生は『自主休講（いわゆるサボリ）』という形でハワイに来ていた（表2参照）。

参加者の滞在日数に影響を及ぼしているものに大会開催の時期と職業が挙げられよう。12月上旬から中旬にかけて1週間以上の休暇をとることは、社会人のみならず学生にとっても困難といえよう。この時期に観光旅行として有給休暇は取り難いが、マラソン大会参加ならば周囲の心情的な賛同を得やすいのかもしれない。しかしながら日本人海外旅行者の平均旅行日数（観光白書、1990）に比べると、マラソン参加者は旅行日数が2.2日も短いのである。

支出傾向

ホノルルマラソン参加にかかった総費用の平均は、277,800円（1988年）、327,500円（1989年）、269,690円（1990年）であり、最も多い支出金額の幅が20～30万円未満であった。1988年と1989年の調査は、大会のレース直後とレースの翌日に実施したため、回答者の数値は概算であった（表5参照）。これに対して1990年は全ての買い物等を済ませ、帰国便に搭乗する直前に調査を実施したことから、回答者の支出金額値はかなり正確と考えら

れる。

1990年の調査では支出項目の詳細も調べており、スポーツツーリストの詳しい支出実態も明らかになった（表6参照）。表6に示される通りパッケージ・ツアー代が総支出の56%と大きな比重を占めていた。おみやげ代の平均が約4万円になっており、ハワイにおいて消費した総金額も10万円未満と通常の観光客に比べてかなり少ないといえよう。予想していた「金満ニッポン」を象徴するような派手な支出をしていなかった理由としては、サンプルの年齢層の低さ、时期的な金欠症、マラソンランナーの特性、現地における買い物時間の少なさ等が推測されよう。

1990年のサンプルの平均パッケージ・ツアー代は16万千円となっており、3泊5日（5日間コース）または4泊6日（6日間コース）の平均的な値段であろう。現在は6日間コースが主流であり、ハワイに5日間滞在がうたい文句になっている。しかし帰国便の出発が早期または午前中に集中しているため、実質的には4日間の滞在となる。毎年ビジネスとして800人近くの参加者をグループツアーで連れていく某出版社では、178,000円を最低の値段として7種類の6日間コースのツアーを組

表5. サンプルの総支出額の傾向（性別）

	1988年	1989年
%*.....	
男性の総支出額		
20万円未満	14.9%(n = 21)	19.1%(n = 13)
20-30万円未満	48.9%(n = 69)	32.4%(n = 22)
30-40万円未満	22.0%(n = 31)	19.1%(n = 13)
40-50万円未満	7.1%(n = 10)	8.8%(n = 6)
50-60万円未満	5.6%(n = 8)	10.3%(n = 7)
60万円以上	7.8%(n = 11)	10.3%(n = 7)
女性の総支出額		
20万円未満	11.9%(n = 5)	20.0%(n = 5)
20-30万円未満	42.9%(n = 18)	36.0%(n = 9)
30-40万円未満	26.3%(n = 11)	32.0%(n = 8)
40-50万円未満	14.3%(n = 6)	8.0%(n = 2)
50-60万円未満	2.3%(n = 1)	4.0%(n = 1)
60万円以上	2.3%(n = 1)	0.0%(n = 0)

注：()内はサンプル実数

* 全体のパーセントは縦にみる

表6. 第18回参加者の支出の詳細(年齢別)*

	30歳未満	30歳代	40歳代	50歳以上	全体の平均
パッケージ・ツアー代	141,283	162,832	172,786	165,716	150,992
事前準備費(出発前)	19,021	27,508	21,286	21,933	21,018
ハワイでの食事代	15,823	28,883	20,732	20,901	189,092
ハワイ観光・交通費	9,945	10,242	11,176	14,748	10,952
ハワイでの娯楽費	2,841	4,228	2,989	6,087	3,673
お土産代	40,439	50,749	40,307	45,420	42,966
自分の買い物	18,074	22,250	19,286	18,465	18,869
その他(上記以外の支出)	2,244	2,380	2,411	1,452	2,128
国内支出小計	160,304	190,339	194,071	187,649	172,010
国外支出小計	89,381	118,733	96,901	107,073	97,680
総支出額	249,685	309,072	290,972	294,722	269,690

* この表は、菊池ら(1991)のスポーツイベント参加者の支出傾向の表を修正したものである。
 注：単位は全項目にわたり日本円。数値は全て小数点以下の四捨五入による。
 米ドルの換算レートは日本円135円で計算。
 有効サンプル数は243。

表7. サンプルの同伴者の傾向(性別)

		1988年	1989年	1990年
		%*		
男	性			
	単 独	23.8%(n = 36)	28.1%(n = 18)	10.6%(n = 27)
	家 族	13.2%(n = 20)	18.0%(n = 12)	13.7%(n = 35)
	友人・知人	41.8%(n = 63)	25.0%(n = 16)	29.8%(n = 76)
	スポーツクラブのメンバー	15.2%(n = 23)	17.2%(n = 11)	32.6%(n = 83)
	そ の 他	6.0%(n = 9)	10.9%(n = 7)	13.3%(n = 34)
女	性			
	単 独	14.0%(n = 6)	13.0%(n = 3)	3.0%(n = 3)
	家 族	14.0%(n = 6)	13.0%(n = 3)	14.0%(n = 14)
	友人・知人	44.2%(n = 19)	52.2%(n = 12)	42.0%(n = 42)
	スポーツクラブのメンバー	25.6%(n = 11)	17.4%(n = 4)	19.0%(n = 19)
	そ の 他	2.2%(n = 1)	2.6%(n = 1)	22.0%(n = 22)

注：()内はサンプル実数
 * 全体のパーセントは縦にみる

んでいる。

標準的なパッケージには、往復運賃、宿泊費、半日市内観光費、1回の昼食費が含まれており、16万円~27万円と値段にある程度の幅をもたせて客の差別化を行っている。ただしこの値段は、東京(成田)または大阪発着のツアーであり、地方空港からの発着する客にはさらに追加料金が請求

される仕組みになっている。また、10万円未満や11万円ほどのパッケージ・ツアーでもまわっており、ツアー料金は千差万別の様相を呈している。

同伴者

表7及び表8にスポーツ・ツアーにおける同伴者の詳細が示されている。30歳未満のマラソン参加者のツアー同伴者は「友人・知人」が最も多く、

表8. サンプルの同伴者の傾向（年齢別）

	1988年	1989年	1990年
. %*			
30歳未満			
単 独	20.5%(n = 17)	24.7%(n = 18)	3.4%(n = 7)
家 族	3.6%(n = 3)	11.0%(n = 8)	7.3%(n = 15)
友人・知人	61.4%(n = 51)	37.0%(n = 27)	44.9%(n = 90)
スポーツクラブのメンバー	12.0%(n = 10)	19.2%(n = 14)	22.9%(n = 47)
そ の 他	2.4%(n = 2)	8.2%(n = 6)	22.5%(n = 46)
30 歳 代			
単 独	27.9%(n = 12)	22.2%(n = 2)	12.3%(n = 7)
家 族	11.6%(n = 5)	33.3%(n = 3)	19.3%(n = 11)
友人・知人	37.3%(n = 16)	33.3%(n = 3)	26.3%(n = 15)
スポーツクラブのメンバー	18.6%(n = 8)	11.1%(n = 1)	33.3%(n = 19)
そ の 他	4.6%(n = 2)	0.0%(n = 0)	8.8%(n = 5)
40 歳 代			
単 独	21.1%(n = 8)	14.3%(n = 1)	9.1%(n = 3)
家 族	21.1%(n = 8)	28.6%(n = 2)	30.3%(n = 10)
友人・知人	23.7%(n = 9)	0.0%(n = 0)	3.0%(n = 1)
スポーツクラブのメンバー	23.7%(n = 9)	28.6%(n = 2)	51.5%(n = 17)
そ の 他	10.4%(n = 4)	28.6%(n = 2)	6.1%(n = 2)
50歳代以上			
単 独	16.6%(n = 5)	0.0%(n = 0)	18.1%(n = 13)
家 族	33.4%(n = 10)	50.0%(n = 3)	20.8%(n = 15)
友人・知人	20.0%(n = 6)	0.0%(n = 0)	20.8%(n = 15)
スポーツクラブのメンバー	23.3%(n = 7)	33.3%(n = 2)	34.7%(n = 25)
そ の 他	6.7%(n = 2)	16.7%(n = 1)	5.6%(n = 4)

注：（ ）内はサンプル実数

* 全体のパーセントは縦にみる

「スポーツクラブのメンバー」を含めると、仲間と一緒に旅行するサンプルが過半数を越えていた。これに対して40歳以上のサンプルの同伴者は、「家族」や「スポーツクラブのメンバー」が多く、「友人・知人」と一緒に旅行していないことと、単独旅行も極めて少ないことが表8から明かである。

単身で旅行する参加者の減少が1990年にみられた。これはサンプルの85%がホノルルマラソン初体験であり、単独参加よりも誰かと一緒に出場した方が心強いからであろう。また、ホノルルマラソンというマーケットに、旅行業者やスポーツ関連産業が雨後の竹の子のごとくグループツアーを数多く組んでいるからであろう。各種のグループツアーを利用する主な理由は、「パスポートの取得」

「大会参加申込」等の代行をしてくれるというサービスの利便性による（個人面接、1990）。旅行準備の煩雑さを旅行代理店などに手数料を払って行ってもらって旅行者が年齢に区別なく増加する傾向が今後みられるであろう。

結 語

本研究では、海外スポーツイベントへの日本人参加者の実態を明らかにし、スポーツ・ツーリズムの基礎資料を提供するために、1988年から1990年にかけてホノルルマラソンに参加した日本人ランナー673名に対して質問紙調査を実施した。

データを分析した結果、日本人のスポーツ・ツ

ーリズムは以下のようにまとめられる。

1) マラソン競技型よりもマラソン体験型が参加者の大半を占め、参加する楽しみを重視する傾向が強い特徴がある。

2) 大会開催の時期と種目の特性から6日間コース(4泊6日)が標準的なスポーツ・ツアーとして定着する傾向がある。

3) スポーツ・ツアーの同伴者は、年齢層と性別で明確な違いがある。

4) 30歳未満が主力参加者のため、大会開催地における消費の主流は節約型になっている。

5) 再来志向の強さが行動に反映していないことから、海外スポーツイベントは繰り返し参加する大会にはなり難い弱点がある。

以上のように、日本人のスポーツ・ツーリズムの違いが年齢層や性別で明らかにみられた。スポーツ・ツーリズムの研究はこれから萌芽期を迎えるが、参加者の年齢層や性別はもとより、スポーツイベントの特性と開催時期がスポーツ・ツーリズムに影響を及ぼすことが示唆された。

謝 辞

本研究の質問紙作成に際して、本学の菊池秀夫先生及び神戸大学の山口泰雄先生に貴重なアドバイスをいただいた。またデータの収集については、ノースウエスト航空会社の上野照司氏、本学大学院社会体育学コースの松本耕二君、体育経営管理学講座の第5期生の小幡幸子君、バスケットボール部の中野美穂君に多大な協力をいただいた。さらにデータの統計処理については、東京学芸大学の池田克紀教授にご協力を賜った。ここに感謝の意を表します。

引用・参考文献

- 1) De Knop, P.: Some Thoughts on the Influence of Sport on Tourism. Proceedings of the International Seminar and Workshop on Outdoor Education, Recreation and Sport Tourism, pp. 38-45, Emmanuel Gill Publishing, 1987.
- 2) Honolulu Marathon Association: Breakdown of 1990 Participants. (Undisclosed information) 1990.
- 3) Honolulu Marathon Association: Aloha-History of the Marathon. pp. 18-19, Honolulu Marathon official program, December, 1990.
- 4) ホノルルマラソンガイドブック, pp. 63-72, ランナーズ, 1987.
- 5) 菊池秀夫, 野川春夫, 松本耕二: スポーツイベント参加者の支出傾向に関する研究, 日本体育学会第42回大会号, p. 441, 1991a.
- 6) 菊池秀夫, 野川春夫, 松本耕二: スポーツイベント参加者の支出傾向に関する研究, 日本体育学会第42回大会補足資料, 1991b.
- 7) 観光白書(平成2年版), 総理府編 大蔵省印刷局 pp. 25-45, 1990.
- 8) Leiper, N.: The Framework of Tourism Towards a Definition of Tourism, Tourist and the Tourist Industry. Annual Tourism Review, 6 (4): 390-407, 1979.
- 9) 松本耕二・野川春夫: ホノルルマラソン完走者の満足要因の分析. レクリエーション研究, 第23号, pp. 38-39, 1990.
- 10) 野川春夫・菊池秀夫・山口泰雄・長ヶ原誠・池田勝・三浦嘉久: 地域活性化におけるスポーツイベントの総合研究. 鹿屋体育大学調査報告書, pp. 1-19, 1990.
- 11) 野川春夫・菊池秀夫・山口泰雄・長ヶ原誠: スポーツイベントに関する研究(1) - イベント参加者の視点から -. 鹿屋体育大学研究紀要, 第6号, pp. 57-67, 1991.
- 12) Ruskin, H.: Selected Views on Socio-Economic Aspects of Outdoor Recreation, Outdoor Education and Sport Tourism. Proceedings of the International Seminar and Workshop on Outdoor Education, Recreation and Sport Tourism, pp. 18-37, Emmanuel Gill Publishing, 1987.
- 13) 塩満勝磨: 中高年者国際競技会参加者の実態について, 日本体育学会第41回大会大会号, p. 91, 1990.
- 14) 「スポーツと海外旅行」Sports Industry, No. 58, pp. 10-46, 1991.
- 15) 運輸白書(平成元年版), 運輸省編 大蔵省印刷局 pp. 323-333, 1989.
- 16) Wang, Y.: The Scope of Sport Tourism as an Important Facet of Singapore's Image as a Gateway to the Orient. Proceedings of the International Seminar and Workshop on Outdoor

Education, Recreation and Sport Tourism. pp. 78-81, Emmanuel Gill Publishing, 1987.

- 17) Westland, C.: The Philosophy of Outdoor Education, Recreation and their Place in Modern Society. Proceedings of the International Seminar and Workshop on Outdoor Education, Recreation and Sport Tourism, pp. 7-17, Emmanuel Gill Publishing, 1987.
- 18) 山田文男・神野 稔: ホノルルマラソンフィニッシャー-日米比較研究. レクリエーション研究, pp. 68-73, 1988.
- 19) 山口泰雄・野川春夫・菊池秀夫・池田勝: 生涯スポーツイベントの参加者研究-ねりんピックの事例から-日本体育学会第41回大会大会号A, p. 99, 1990.
- 20) 山口泰雄・野川春夫・菊池秀夫: 地域活性化に及ぼすスポーツイベントの研究. 日本体育学会第42回大会大会号A, p. 145, 1991.